

法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

序

著者	安岡 昭男
出版者	法政大学沖縄文化研究所
雑誌名	琉球の方言
巻	14
発行年	1990-03-08
URL	http://hdl.handle.net/10114/11967

序

日本列島の一翼をになう琉球列島には、ほかの列島部分に比べて、優るとも劣らない価値をもつ言語が分布している。これらは、琉球語、琉球方言、沖縄語、沖縄方言などによばれているが、どう呼ぼうと、その学問的価値は変わらない。

日本列島の言語は、永い歴史過程の中で、大きく本土の言語と琉球列島の言語に分かれた。したがって、本土の諸方言を見ているだけでは日本語の一面しか見えないし、同じく琉球列島の諸方言を見ているだけでは日本語の一面しか見えない。これら日本列島の両言語を比較研究しない限り、日本語の歴史的な全体像は見えてこないであろう。

昨今、日本列島は、どこをみても、情報化社会に入っていて、日本列島の北から南まで、それぞれの風土の中で、永い年月をかけて発展してきた諸方言が、かげをひそめつつある。これらを収集することは、現代に生きるわれわれの極めて大きな一つの任務であるにちがいない。収集だけに意義があるのではもちろんない。本土と琉球列島で生みだされた言語の多くのヴァリエーションは、新しい学問を生み出す理論的な基盤になるにちがいない。

この『琉球の方言』の目的は、新しい学問の基盤づくりと資料の収集をたすけることにある。これからも日本列島全域の諸方言の資料と学問的な理論研究の成果を収めていきたい。

発刊十余年にして本書の目的と意義が理解され、国内に限らず、諸外国にも輪が広がり、歓迎されていることは、所員ならびに研究協力者の大きなよろこびとするところである。

1990年 3 月

法政大学沖縄文化研究所

所長 安 岡 昭 男